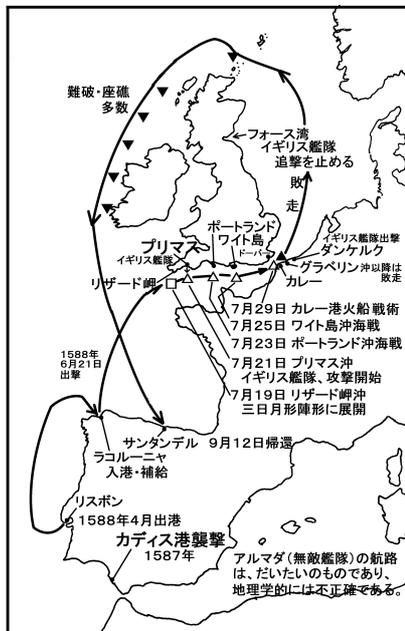


オランダの独立

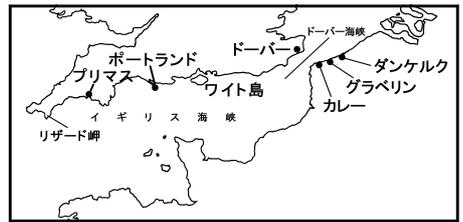
- 1) ネーデルラントは1477年、マクシミリアン1世がブルゴーニュ公国の継承者マリーと結婚して以来、【1: 】の領地。【2: 】工業やバルト海での中継貿易で繁栄。【3: 】が広まっていた。各都市は伝統的に強い自治権を持ち、南部フランドル地方の【4: 】(現ベルギー)は既に国際商業の中心であった。
- 2) **オランダ独立戦争 1568-1609**とは？
1556年、父王カルロス1世からこの地を継承したスペイン王フェリペ2世位1556-98が16世紀後半、カトリックを強制し、都市の自治権を剥奪し、重税を課し、異端審問を行った。まず農村の中小貴族が自治権を求めて反抗し(彼らはスペイン勢力から「ゴイセン」と呼ばれた)、これに【5: 】の商工業者が加わって、貴族・商工業者・農民・労働者が一体となった独立戦争に発展した！
- 3) カトリック勢力の強い南部10州はアラス同盟を結成し途中で脱落した。この地域はラシュタット条約(1714)でオーストリア領、ウィーン議定書(1815)でオランダ領となり、七月革命後にベルギーとして独立宣言(1830)。一方、1579年、ホラント州(「オランダ」の語源※1)などの北部7州は【6: 】を結成、【7: 】の支援を受けて、長期戦を戦い抜いた。※2 なお、フランスはユグノー戦争(1562-98)中であつた。
- 4) 1581年、【8: 】※3を総督(統領)とする【9: 】(オランダ)の独立を宣言した。1585年、スペイン軍はアントウェルペン(現ベルギー)を破壊した。1588年、【9】を支援するイギリスにスペインは無敵艦隊(アルマダ)を差し向けたが、スペインは敗北した。これをアルマダ戦争※4と言う。この深刻な敗戦後もスペインはオランダの奪回に努めたが、オランダはバルト海方面での中継貿易で利益をあげ、1602年には東インド会社まで設立して国力を強め、1609年、スペインと12年間の休戦条約を勝ち取り、事実上の独立を達成した。独立が国際的に正式に承認されたのは、1648年のウェストファリア条約においてである。
- 5) **オランダ独立戦争は宗教戦争であると同時に、オランダ市民によるスペイン絶対王政に対する市民革命(ブルジョワ革命)の先駆けとも見る**ことができる。

- ※1 この国を「オランダ」と呼ぶのは日本とポルトガル。欧米ではNetherlands。大学入試は「オランダ」でOK。
- ※2 イギリスはオランダの独立を支援した。しかし、後に英蘭戦争1652-74で雌雄を決することになる！
- ※3 イギリスの名誉革命(1688-89)でイギリス王となりメアリと共同統治したオラニエ公ウィレムとは別人である。
- ※4 **1588年のアルマダ戦争**に関する以下の戦史知識が出題されることはないだろうが、16世紀においても、作戦を誤れば、惨めな大量戦死が待っていることがリアルに想像できる。なお、無敵艦隊のイギリスを左周りに1周する航跡は覚えておこう。前年の1587年に、ドレーク(海賊出身)はカディス湾に侵入、スペイン艦隊を攻撃して挑発した。スペイン国王フェリペ2世が、英国侵攻を図って130隻(兵員約3万)の艦隊をもって出撃したが、ハワード=ドレーク(海賊出身のドレークとは別人)らの率いる英国艦隊に惨敗、スペイン没落の一因となった。この時、この艦隊に与えられた名称が「アルマダ(スペイン語 Armada Invencible)」でこれを「無敵艦隊」と訳す。



フェリペ2世の作戦は、無敵艦隊をネーデルラントに向かわせ、そこに駐留する3万余の精鋭部隊と合流してイングランドに侵攻するというもの。

1588年4月 無敵艦隊、リスボン出港。
 5月18日 無敵艦隊、補給のためにラコルーニャ入港
 6月21日 無敵艦隊、ラコルーニャ出港。これが出撃。
 7月19日 無敵艦隊、リザード岬沖に到着。三日月形の陣形とる。
 7月20日 イギリス艦隊、プリマス港を出港。
 7月21日 プリマス沖海戦。
 7月23日 ポートランド沖海戦
 7月25日 ワイト島沖海戦
 7月29日 カレー港に停泊中の無敵艦隊に対して、ドレーク(海賊出身のドレーク)率いるイギリス艦隊は「火船戦術」を行う。
 グラベリン沖以降は、砲弾を撃ち尽くし、潮流に乗って漂流するスペイン艦隊に対してイギリス艦隊は一方的に砲撃を行った。フォース湾沖でイギリス軍は追撃を中止した。
 7月30日 無敵艦隊、北海方面に脱出。スコットランド沖を廻る航路をとったためスコットランド沖やアイルランド沖で多くの船が難破・座礁し、死者多数。
 9月12日 無敵艦隊、サンタンデルに帰投。
 イギリス海軍は小回りのさく小型船に射程距離の長い砲(カルバリン砲、徳川家康も大阪の役で使用)を搭載し、狭いドーヴァー海峡での戦いに有利だった。



この項目は、「世界戦史のページ」(<http://www.h4.dion.ne.jp/~kosak/index.htm>)を参考にし、一部記事の転載についてご承諾を頂いた。

補足1 世界史の教材に出てくる海賊と言ったら、王直(16世紀、明)とアルマダ戦争の英海軍副司令官として活躍したドレーク Drake 1543?-96 ぐらいのものである。アルマダ戦争以前に、ドレークは、各地のスペインの植民地やスペイン船を攻撃しながら、1577年から80年にかけて世界周航を達成した。世界周航を達成したという前置文の後の()にはマゼラン艦隊が入るとは限らないのだ。ドレークはその功績から、イギリスでは英雄とみなされる一方、海賊行為で苦しめられていたスペイン人からは、悪魔の化身であるドラゴンを指す「ドラコ」(ラテン語でも竜または蛇を意味する)の呼び名で知られた。そういえば、『ハリー・ポッター』では、ハリーのライバルの名はドラコ=ルシウス=マルフォイ。

補足2 フェリペ2世はイギリスの支配をもくろみ、イギリス女王メアリ1世と1554年に結婚したが、女王は1558年病死しており、アルマダ戦争の時は既に死別していた。

17世紀前半はオランダの商業覇権全盛期！

- 1) 独立後、17世紀半ばの【10: 】は、フランドルのアントウェルペンにかわって、国際商業と金融の中心となり、オランダは、環大西洋経済の中心となった。アムステルダムは宗教や新しい思想に寛大だったため亡命者や情報が集まった。南部から多数の商工業者が亡命し、経済活動は劇的に発展した。なお、1634年から37年にかけて、アムステルダムでトルコ産チューリップの球根栽培の権利取引が過熱化、球根1つに現在の貨幣に換算すると数千万円に相当する値がついたという。(オスマン帝国のアフメト3世位1703-30の「チューリップ時代」は18世紀前半。)
- 2) オランダは、少人数で操船でき大量の荷を積載可能な船舶を建造できる高い【11: 】技術を誇り、バルト海貿易を制覇した。また、この貿易で東ヨーロッパから帆布や材木が安く大量に供給され造船業は一層発展し、不足しがちだった食料も安定供給された。毛織物工業、陶器業、醸造業、漁業の他、干拓で耕地を増やし農業なども栄えた。

オランダのアジア政策

- 1) 1602年、【12: 】(正式には連合東インド会社 VOC)を設立。拠点はジャワ島の【13: 】(現ジャカルタ)。モルッカ諸島(現マルク諸島)、マラッカにも進出した。モルッカ諸島への進出をはかるイギリスは現在のアンボン島に商館を建設した。1623年、オランダはイギリス商館を襲撃、雇用日本人も含む全職員を凄惨な拷問の末殺害し、モルッカ諸島からイギリス人を追放した。これを【14: 】という。イギリス側が攻撃計画を練っており、これを察知したオランダが先制攻撃をかけたというのが真相のようである。これ以降、イギリスはインド経営に専念する。オランダは、1652年、アフリカ南端に【15: 】を建設し、インド航路を確保した。
- 2) 17世紀には、有力な銀の産地であった【16: 】が、ここでは省略する様々な事情で、オランダ人以外のヨーロッパ人を排除した。全盛期のオランダは、日本産の銀の輸出を扱った。鎖国時代、日本にとって唯一の欧米語はオランダ語だった。「和蘭風説書 オランダふうせつがき」は鎖国日本の貴重な情報源だった。オランダは今でも日本の最大の友好国の一つ。
補足1 1600年、マゼラン海峡を越え太平洋を横断したオランダ船リーフデ号を含む船団は離散、損傷して豊後国(現大分県)に漂着。日本に到着した最初のオランダ船である。クルー110名中、生存者僅か24名(救助後更に3名死亡)。その中に江戸幕府の外交顧問になったヤン=ヨーステンや日本に来た最初のイギリス人ウィリアム=アダムス(三浦按針)も含まれていた。リーフデ号の船尾に飾られていたというエラスムスの木像が現存する。備砲と砲手は関ヶ原の戦いで使われたという(未確認)。
補足2 蘭医緒方洪庵の適塾の秀才、福沢諭吉のオランダ語力は恩師を凌いだ。幕末の江戸に出てきた福沢は既に英語の時代であると気づき一時は落胆したが、すぐに思い直して英語を基礎からものすごい勢いで学び、英語教育者となった。1868年4月(慶応4年)、英学塾が手狭となったため芝(現港区)にまとまった土地を買取り、移転して慶応義塾とあらためた。慶応義塾は昔本場に塾だったのである！上野の山から砲声が聞こえると浮き足だった塾生が「先生、大変なことが起きています。授業どころじゃありません、見に行きましょう」と言うと、福沢は「諸君が今なすべきことは学問をおいてほかにはない」とたしなめたとされている。
- 3) 中国との貿易でも優位に立った。
- 4) 北アメリカにも進出した。1614年、ニューネーデルラント植民地建設。ブラジルでも砂糖生産の実権を握り、アフリカでは奴隷貿易に加わった。

イギリスの発展

- 1) 16世紀後半には、国王を首長とする英国教会(新教)を確立したが、それは首長法(1534、ヘンリ8世)、統一法(1559、エリザベス1世)などの議会立法により実現されたという特徴を持つ。17世紀のイギリス革命以降、**経済活動の自由**が保障され、特権商人やギルドにかわって、新興商人やジェントリ(郷紳)らが旺盛な産業活動を行っていた。ジェントリの協力を得て、イギリスの王権は【17: 】の下で強化された。
- 2) 資本主義は16世紀後半、イギリスの毛織物マニュファクチュアをもって成立した。毛織物は売れ行き好調。増産したいが原毛が不足していた！そこで、地主(貴族やジェントリ)や領主は、農地を農民から取り上げ、生垣いけがきや塀で囲んで**牧羊地**にした。このような行為はイギリスで15世紀末に始まり**16世紀に最高潮に達した**。厳密には非合法である。この生垣や塀は羊の管理用であるとともに「農民入るべからず」の固い意思表示でもあった。これを【18: 】と言う。土地を追い払われた農民は、都市に移住し、マニュファクチュアの労働者になったとされてきたが、現在では人口の移動はさほどでもなかったという説もある。労働者は常に供給過剰で、低賃金で長時間働かされた。就職できない人は、浮浪人とならざるを得なかった。「浮浪」は犯罪とされ、鞭打たれ強制労働させられた。毛織物業は、大発展し、イギリスの国民産業になった。1600年の、東インド会社設立に象徴されるエリザベス1世期の海外進出には、このような背景があった。
「……羊は、昔はおとなしい動物でしたが、イギリスでは今や人間を食うようになりました……」トマス=モア『ユートピア』(1516)より
- 3) 以上で述べたように、イギリスは議会制の発達と国民産業の確立という2点で、単に中継貿易に依存するオランダに対し優位に立つことができた。

オランダの商業覇権傾く！ 17世紀後半から、オランダの商業覇権が傾いた理由は以下の通りである。

- 1) イギリス、フランスが重商主義政策をとって、国際商業の独占とオランダの追い落としをはかったため。特に、イギリスの【19: 】(1651)制定とこれを原因とするイギリス・オランダ戦争(1652-74、3次に渡る)の敗北。
【19】: イギリスとの貿易にはイギリス船か貿易相手国船しか認めないという法律。
- 2) オランダは、17世紀末にはようやくモルッカ諸島の香辛料の独占に成功したが、オランダ、イギリス両東インド会社の競合や、各地で生産されるようになったことから、供給過剰となり、17世紀末には【20: 】が起き、高収益が望めなくなった。日本銀の枯渇、清の海禁政策もあいまって、3世紀続いたアジアの大交易時代が終わった。
- 3) インド産の綿織物や中国産の茶が国際商品として脚光を浴びるようになり、国内賃金の高かったオランダの毛織物は国際競争力を失った。